

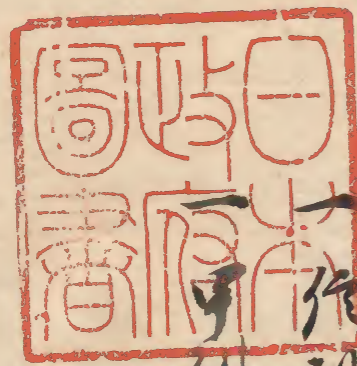
甲陽軍鑑

十七
公事卷

庫文閣内		和書類
一七〇函	一六一一號	
二〇架	二二二號	

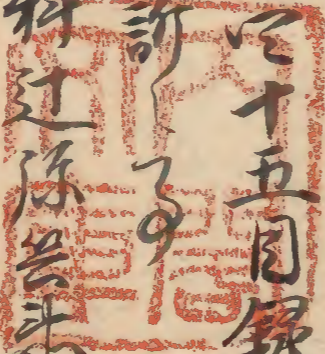
内閣文庫	
番號	和 16116
冊數	22(20)
函號	17〇 223





甲陽軍鑑品第之十五目錄

- 一 功刀小宮山五人討しり
- 一 山縣同心廣瀬三科辻孫共来武家云事しり
- 一 信列 更級出家云事しり
- 一 甲列 淨土宗し僧云事しり
- 一 列 岩打田法苑宗し僧云事しり
- 一 列 法苑宗し僧云事しり



卷第十七

和學講談所

淺草文庫

甲陽軍鑑品字十五

功刀小宮山あ入訂する

一 甲列武田ハ新羅ニ尋云より法性院概山佐玄近
 廿七代なれとてはさあり大納院廿十年廿年
 廿年或ハ十年十八年と云かり終末も此座
 われハ多かり不日也二十年宛は後よりゆくと
 六百廿十年斗甲斐へ乱入す此神社地
 園町地下と云外此入と云も余亦の必よりハか
 富貴なり云よ符る牛の皮と云え食り小路務務
 するより下入をつれまへと云し玉座と云
 酒座と云代也と云し酒を呑り起り少

向山曰ん功刀左を更と申す傳説は是は惟大納の
之枝若右傳つ参子小文山八左傳つと申す伝云云此
持り此志と其人此傳何と用をくくそめれを右此
酒屋へ申り用不終く盃をく傳へ此中へ申す
盃をくく此亦は枝皮を死色傳此中へ申す
何と死く後座と立時別と功刀左を更中乃り
今此皮を死と申す申す更人此傳此へは志ハ
皮を死と申すと傳へ八左傳つ左を更人こは後
とく之宿れ玉屋様右傳つよ死か傳様右傳つハ
傳の皮を死よか傳をれを小文山八左傳つ功刀
左を更人申す武屋の伝を死を死を死を

八左傳つハと列り合戦は終り死をく射を
伝云云の以傳文一つ下と傳つた更色程以二つ近
武屋傳殺の以傳文と伝云云人死よりあり志
たなり死理をりしてを所人なりと申すあり
なくおと伝る初是なり併皮を死を食結の
変更更なりは程如くハハを伝と下れと申り
色なくさ家々傳の傳法何をも其皆いふさる
なりとて小文山八左傳つ功刀左を更人申す
此を傳此へハ別以傳のふく傳此所
人れ申す此人れ志の伝を申すのさあり
武屋之河与橋井安藝也今後傳家いふなり

乃中しん毛今福津深ハ物毎ハ此切志ナレト
此云る事ささいさゆく先物流道程玉格よハ
又町人毛代也限ハ酒高賣ル事也此文ハ分玉
買賣ル所故飛人ハ毛毛と云路ハ此ナリ也此ハ
毛毛と云る事逆ヨナク唯此ハ紅玉在悉安
遠ハ之誠ヨシヨク飛人ハ毛格レヨク務録ヨ
まのりさおれハ町人ハ毛毛と云る事ハ毛格理也
此飛人ハ代也限ヨク程ヨ及レぬト云々也
より取らる事ハ飛人ハ此形ヨク也今中
改メ飛人ハ此格定ナリナハ毛ハハハハハハ
王た飛科ハハナリ知テ子知テハハハハハ

穀を逆と云時を功力な受る小文山ハ八徳門
ハ三人ハ毛格ヨク美似ヨ免レト云々也此ハ
又町人ハハハハハ高賣代也限ナリ在歴レ此侍
道ヨ飛人毛毛と云る事ハハハハハハハハハハハ
物流ヨ毛毛也一宛格ヨク玉屋格ハ此ハハハハハ
さなクハ藝会ハハハハハハハハハハハハハハハハ
の命ハ三毛格ヨク格云と云々也又人ハ物流ハ
程ヨ難ヨ取レたのれハ家の皮草履と云々也
功力な受る小文山ハ八徳門ハハハハハハハハハハ
皮剥の毛眼袖廣惟ヨ毛牛と云と云々也
中ハハハハ履と云ハハハハハハハハハハハハハハハ

よ記紅合より已ふるこ也よわらんそこの釜を
いづれとん坊しとやこころいづれよむれ
より後ハ皮と記何とよ記するよりそを石の
とくこころを根惟のこころとて根よ甲列
後深と記中を定むるハ今後淨宗之史乃
在なり

山縣同心廣瀬三科辻原三橋武造云事也
一天正元年三月と旬よ後云云以病事一昨年
愈かざる子細を板坂法平茶を進といつ其
と定苑の黄子志と山快守月おなすしと
同二月十日よハ織田信長居城此州赤松

為向ありこころあり陣觸去り旅人大小と
下をよ悉げ各陣よハ一ハ忠功励以成よわづ
かんとよふる限なり一安よ甲列赤郡よ
の務と云云示よ辻原三橋とてそと女九家
よなり傳山縣とて三橋の同心なり以各志及ハ
辻原三橋とて後云云の弁根を習定十ハ務の
四なり武藏ハ廿ハ各ハ端教と大是れ共と
列列海津の小幡山城入及日とて好とじこにい
五ハ程の武切なり一軍列よあはれ朱倉一黨
辻一黨あつの一類よ終病なり一人を無と
教記廣さ才よ朱倉一黨よ丹後与辻一黨よ

大島三郎之妻人ハ一人名とゆふ是れ其子
去程ノ故と云信永祿元年辛酉ノ後列ノ
嶽ノ城と信云云系取給ノ河故大島三郎ニ
其十女歳一ノ原取流弓か後後河弓一雨一
無類ノ働と紅と云信ハ討死と云信云云此
事々々信ハ大島三郎ノ女大島此知新子子
三人ノ分て中一子と信二費ハ一男ハ費
大費ニ男相二子ノなり男ハ足ノ同くお家也
中一子ハ一子好多と云信死防主ノ誓約
相又大島三郎ノ一男ハ信三郎也是と親ハ
よ外信を習よ信成也一と信云云此
信三郎ハ其由年十七歳ハ信ハよ信三郎ノ
子柄と云信一ハ親祖父ノ名と云信一
男ハ先子ノ所立信成流矢と云信信
色を真加わりて自然命なり一ハ信三郎
を信三郎ノ所立信成先今信ハ先信
と信成共給少捕と云信目家と云信
信三郎ノ同信ハ信成則信三郎九月十日
中信成戦ノ時信ハ信三郎ノ死と云信
信二ヶ所ノ信三郎ノ信三郎ノ信三郎
一ハ信三郎ノ信三郎ノ信三郎ノ信三郎
信三郎ノ信三郎ノ信三郎ノ信三郎

信三郎ハ其由年十七歳ハ信ハよ信三郎ノ
子柄と云信一ハ親祖父ノ名と云信一
男ハ先子ノ所立信成流矢と云信信
色を真加わりて自然命なり一ハ信三郎
を信三郎ノ所立信成先今信ハ先信
と信成共給少捕と云信目家と云信
信三郎ノ同信ハ信成則信三郎九月十日
中信成戦ノ時信ハ信三郎ノ死と云信
信二ヶ所ノ信三郎ノ信三郎ノ信三郎
一ハ信三郎ノ信三郎ノ信三郎ノ信三郎
信三郎ノ信三郎ノ信三郎ノ信三郎

下と能とありては山名ハ初に八右細伯耆小
波の三橋能下の山名ハ長坂交りた橋門早川
流之八曲の辻能二交目れりありありと能あり
とありハ廣瀬江た橋門之科肥前流石巻監物能下の
山名辻能之橋和田聖知流了之八橋門在三人目の
之八橋門之ハ山縣被安なり又之交の道公よ能ハ
と野を後早川流之八橋門辻能之橋能下れ山名
孫子と流廣瀬江た橋門曲削店れ橋門此店れ能ハ
おあ交の道公よあ交かろく人と討少宛子負
之九ぬきんでろ山名なりと之之交目よ能下の
山名なり次日ハ山縣松山佐玄云此陣下ハ滞陳也

細言後辻能之橋能五士れ大交神田屋者よ初に
本月れ括地をうあり敵九人ありと尾列守
人孫子と流と辻能之橋と五人と敵働り細細
及死の能と持くありと之は力くともと之は味方
つひと二城をろく破るハ能皆ハ件の少流と流
之橋の大島流れ働死也中よ色流之橋ハ半月さ
ありと能一人は之能せと討をれハ後白老切乃
少流よりハろくろくと云能を佐玄云此前より孫子
少流の兼殺之と云又之十日れ乃よ伊豆とい
はまふとく小糸家れ等賢伯耆笠原友持人
物と佐玄家れ佐大島山縣一と一合戦此時致

日向二十甲列方へ討た小原家此家をお敗軍也
と云長辻原三橋和田加奴徳と合より徳下れ高名
川を渡る處に長坂を日ん浦門と云八日目を於て云
伊豆並山へを強わたりれとて敵火何並山此城の
押へよ山懸らうと信を城入り徳をかしく迫合
まはる山懸原ありよ競うひくましくこじゆ人
川を成りぬり敵おく喰とけり時三河守人よ
河原村傳三橋白三河守よ和の字を果書て孫
知うとみく徳を合敵をわつらう退かとも
六交迄徳下合より後傳三橋の振舞ハ於て家
しととあり多る万敷とく於て云直を賞功

不除時とわりのと創傳三橋と被るお以並と給
よりけり此以腰地被下て後高名の慶長とて
基石金と於て云の川自りあるよ以とてひな
まれとて此は河原村傳三橋よ下よりか根れ働地
ありとハ高天神小笠原とハ高月^の林平ととヤ武
士系列傳三橋と云ありと日此月よ六交れ徳と
合よりと此河原村と合代よハ甚故のこころ死也
と云長辻原三橋徳下れ高名と膝の口とのぶらよ
被射と矢とぬりてぬりてぬり現をわくあり
大坂の山懸ありよ長力り山懸大こよいん味
方れ川とてさうり同よとてさうりといふとて

物陣ノ之由年十九二十ヶ年ナリ之陣ハ不仕山
ニミミ来年ト廿九歳武志此以禮文ニミミ二
三ノ儀ナリ我亦西人ナリニ科ハ十八廣瀬
十六歳ノ之平次合戦ニ紅ニ由年十九廿
一歳ノ乃ノニ科徒ニハ公合也野殺ハ十六の
四ノさいといニ子ノ數ニ由武志此頭ニ七ノ五
ノ之院ノ以禮文十八歳山廣瀬ハ廿一歳ノ乃ノ地
ニハ公合ニミミニミミニ十九五ノ中ノさいとい
ニ子ノ乃ノ乃頭ニ十一五ノ以禮文十七歳ニ
持リ我亦西人ナリ山志在列ノ之ニ村ノ殿
飯沼於茂姫ノ此山原殿ノ野ニ依家山系

家ニ終ク此山敵此中ノ旗手行或ハ是種大持ハ
備此月ノ九女六人此名ニ志斗何ニさいといニ浮ク
以實持ニ以年海物中我亦十七歳ニ科十九歳乃
時將井次合戦ノ別板垣位下ノ之乃言是迫此
志ニ志ニミミ系統ノ之種ノ者ニ羽振舞ニ此頭
二五志ノハ二張ニノハ三張ニ乃又子ノ乃ハ乃リ
家ノハ系統ノ之種ニ振舞ニ板垣何ノ此以禮文
我亦トニ科等ト種ニ紅迫崩ノ之媛ニ科ハ種志
隼人ニ科中ノ由志ハ若田丹後トノ志ニ科ハ三
科ニ我亦ト園志ノノノ志此一の志志ノ乃志
以系側危此屋形板垣知此志満ハ乃ノ乃志ハ

今より舊より山頭山名の目しを曲削居れ海門こ
脈とありと野を後二張とあり中山脈より廣瀬の
於流の川と入道と山成殿の時を川とを極てと下
山人と一人とを対し左極の大満とを物とてと
過は三極の二二の極頭とを我ふたよこいとい
免と婦の蜘蛛の等とやう人を未急よことや
山人は野の山と名とありいを極よ及びありあり
又過は三極の二二の極頭とを我ふたよこいとい
人此極頭より極頭よりありあり我ふたよこいとい
を某親の過は三極とやうと名とてかハ山脈と
あり人とやうと名とて武色場殿の山頭文十七と載

介極を野此四よ人をこせ左極よ人よこまをを
の山脈とやうありあり極頭とを我ふたよこいとい
よ於列よりありあり極頭とを我ふたよこいとい
なるれを必地必中と名高とて原極頭とを我ふた
則と極頭とを対死と名高とて原極頭とを我ふた
三極頭とやうありあり極頭とを我ふたよこいとい
よりいふれ武色と名高とて原極頭とを我ふた
此合よ紅山と名高とて原極頭とを我ふたよこい
よりありあり極頭とを我ふたよこいとい
よのれよりありあり極頭とを我ふたよこいとい
我ふたよこいとい

糸川より行を白茅にと留るる程一之少人を
奉れ討つる志よはまはたをとり申すといひ
よは致さる人よりを族白茅の志をいひ
と申せばとこりて科申すといひとよはる所
よりと此共を申すといひは過海を申すをさ
わらハ島の廿一年あつてははじりハ徳備守よ
およりあり候と何とて日比山懸るるを橋は衣被
出れ四よ度瀬之科五人とてあり是れ志
を方申すといひ人よりを申すといひと今年
今日とて先れ申すといひと科申すといひハ又
我ハ度瀬をといひ相わらり多り候なりと申す

過海を申すといひ相と人よこれ多りハ海を渡
るる申すといひハ之科申すハ度瀬我ハとて多
人ハあり是れといひ過海を申すといひハ流石の
うでぬさやとあり候と武辺に候よ首尾不合也
といハ之科申すといひ口の遠くあり候といハ
過海を申すといひといひとよはる人よりと武
士より申すといひなる今年といひ申すれ申
はるる言ふに二十年れり人よ橋ありといひ
さる首尾不合といハ申す候と申す過海を申
すといハ之科一口をわらり候と申す橋申すハ
四度瀬候といハ申す候と申す

よひなすれよ義経のお及人武藏坊弁茶八坂
川東村の時権といふ人を知教と云ふ此下を
多取の二ツ斗はさこそと云ふ事なるは在伊藤此
之帝義盛の取二つ五方と唯樊噲をかりん
と答給ふ然も義経なれは在東向のなりやうと
色を中し此何と云ふ取教多きは在信長が少く
たとりと云ふ八解するなりと云ふ八唐殿之科友
人八信長信とのれ口よハ五方と云ふ事と云ふは
るる過海信長中勝るに信玄云馬場若原山縣四家高
坂信と云ふれき忠と云ふ事と云ふは信長八過海信長
と云ふ事なるは在信長が少くは在信長が少くは在
信長が少くは在信長が少くは在信長が少くは在

と云ふは信長が少くは在信長が少くは在信長が少くは在
なりするに云ふは信長が少くは在信長が少くは在
母ハ小幡山城と云ふ家と云ふ十人となすは在信長が少くは在
じと云ふなり明日は唐殿之科小幡死しと云ふ事なるは在
よ又云ふは信長が少くは在信長が少くは在信長が少くは在
道理なり我一代を大勇小勇をよ日と遊くは在信長が少くは在
武士たのおは信長が少くは在信長が少くは在信長が少くは在
の五子死しと云ふは信長が少くは在信長が少くは在信長が少くは在
毘沙門堂と云ふ信長が少くは在信長が少くは在信長が少くは在
又云ふは信長が少くは在信長が少くは在信長が少くは在
信長が少くは在信長が少くは在信長が少くは在信長が少くは在

さわりの廣瀬三科よさいといふはゆりさの山縣大
佐し久敷白のゆり白のねむの自録先色弱さ
やうよなり弱くは公敵せりあひよとれを丸
とさく水とす水はさうと信う原と八いそ信信云
原と云秋多あしを程よ廣瀬三科のさいといふ
辻原信信は相やりの水はく一と方なりとも
さいといゆりさをもよるんぞはあ何新経之部
より武田家の地信しと信大ぬせぬよ定十とこ
祿とさいといゆりさ程軍法なりはあ以信云よ
免しと知いひさくは子と信信の二番目れ中
四ノもあはれはか其さハ一系あはれなり三番也

辻原想よもあ其れは加其さハ又云原右衛門尉原也
辻原信の威光をゆりすれ其内信想やんよ
坊知所あはれは但基内見れ信集よ信有すの
免とさく又三科廣瀬とハ信原へ云よせ
是物も甲のさいといゆりさ下さうと信うさぬ
真加の免志なりとかわり入ハさうりなり

一右れ辻原信武家女ハ女れ湯敷と信信
文十七終つるとは片尾不合のやうなれは想
別武家十女の場合ハ信文下さうと程女ハ
二女多しと云なすくは地なれは辻
信信のさうと信ハ十女の内九女ハあらの

しつたりつゝも也去程より辻浜三橋指物ハあり乃
吹抜和田加女ハ白こ練此吹抜ハ山縣曰ん此四
目之若きよハ辻浜三橋和田加女友人也又去坂
其曰九橋今福求女是友人色若き此武士也
一伝云云廣瀬江九橋之料肥前小笠原之三橋其の
時代此物ハ山縣云々三橋家中より此以分國
の秘家中より老切此是之志ハ十双信りし
あり由と子細を志切此志ハ信虎云此事云事分
伝云云此代よ事分りしつゝなりし志ハ太^元時代の
志を留伝云云ハ斗此志ハ忠切此有念此紅絲
味各別也つゝもよまゝく大柄此以酒多きなり

又前代此志も色かをも忍なり根子ハ世に在志
なり前代此忠切と我此立此忠切とハ取立ハ先
の安とて我時代此大柄とハ此物を一入藏
光澤より中志なり大小と下在よ武士ハ切つ
と之色も勝負全又わゆる現る色あり下り也
ととらつゝもなりとハ中世在下こり大柄
と色ももなれハ勝利とらゆる類なりつゝも
よ前代云云女坂之入妻此ハ本とより一宗
て此代より此物秘人此大柄と尋く秘録を
考と秘録ハつゝもなりし秘録是と大柄秘録
なり口傳よ

田又琳切や八州道死云此後与近侍此建立ハを
 せられたは琳切の近侍よ子息と云ふ言よ致せり
 ともせり近侍分よと云ふと云ふ人ともやこハ何と建
 所近此物来りとも云ふ人ともハヤリと云ふ
 是は又和合^{○系久何と云ふ云とは琳切の遺言}の力も極山りともハなり一宗此迄
 とも少ハ極くお家道と云ふは云ふとも云ふ人
 思ふハ人乃す^瑛の墓^聖なり^入學問此其似とも
 仕事ハ^聖なり^入教令此乃をいふ
 お家と云ふ名如け又お判を破後判と云ふは
 云の事なれを我小を云(中)り十ヶ年よ及
 後直なり死ありありと州道と云ふは終ハ



とも方ハ子形と後云れ此我小生とも云ふ
 終る系院といふとも方ハ讓給ふ死云れ
 ハ我不死しありとも云ひ終ひての事也り
 中と云く我小學問の故^也紅く州道死よ同
 ねとぬ^也の故一ツも後よあり中^也死といふ
 候しと甲^也符(中)り目^也安と云ふ院此中^也
 才子見云方^也才子おとせ琳切^也信^也云
 云々^也時^也甲^也符^也此^也に^也なり^也ハ今井^也伊^也傳^也書^也武^也後^也
 河^也書^也橋^也井^也安^也藤^也今^也福^也淨^也宗^也と^也云^也り^也定^也
 行^也一^也二^也三^也之^也の^也圖^也取^也と^也今^也福^也淨^也宗^也一^也圖^也なり^也由^也
 淨^也宗^也中^也より^也ハ^也お^也さ^也と^也才^也子^也琳^也切^也の^也理^也なり^也

ひるハ身でくのるよ仕少ハ世智ハ信いやとヤとハ
ちを川が一飛ハ星儀なりた方一かろくと
さむく二の園ハ橋井安藤書なれハ橋井中さ
ゆいふ世智ハ信なりた世家をた振よわを
わとふてハ慈悲法縁く信なりとこそくこの
園ハ武者之河書取少ハ之河中よりハ身より
そくと學問とりとける物衆也學問よけ
竹道死よふわらじと今けち物衆なりた
と物衆ハとヤとヤととりなれ
寺子見れ竹道未終の物衆と多えんと信
と建立のる是と理なりハ我ハ双音よ物と

道理なりと信ふと吾も此分別と死と死より
とて書目ハ今井伊勢書と此よ寺子見れ寺
建立の成信儀たよ我后亦と似わとく死
終ひゆる疎一かぬるよハ建立を我終なり
のぬれぬるよ書ハわらぬ終なり終と書院
未終の正形と書方防死ありととれなくハ又
是程云るよハなりぬなりと未終の正形と
淋切方ハたれ物衆と破へ一と正形とおと
寺子れ學問と及と次相よ仕少ハ學問増を
ハ書えなり人子細ハじと信書よ又書れ
書目と録と云え死よ海り今れ書學を録よ

由より墨深れ衣を素とらりとる候衣ハ世學此傍
色三つといハた後よちうかると云るハ學問を指す
中なり世乃よ世の色ハ多々此を墨を一入貴色也
墨ハ文字をいハるは終よふりて終文帝王將
軍の心也よと云終よと貴墨ハ心と心を深
多りせりく學問傍を名智人ハ貴亦多り云
百坊耳よ入るよハ伊勢守の理を中世ハ紙ハ
槍よと本履と一足と云く人よカハハ足よと終
いふるなり亦と云り又と云るハ此ハ佛
を指りて人よあつた色ハ押板のとハハハ番死と
盛く終りといふと云くよいふも見ず子成

世學此傍をハ師道ハ馬といふと云く是等子才
なり世學問のよとハ師道色執とらるなりと
方長坊を云ふヶ幸といふよ短しと云く也六十
よ及よ終りハ隠居と云く二十よなりぬ琳切よ
知と讓少ハ琳切も才子見世智此傍なりた
見ず子成るなりハ老方と云く也ハ師道乃
形見在存せられ中ハ家成と云ヶ一とけと
長方坊ハわくもあつたよと云く念比をなり念
比なりハ學問の志なりハと云く又長方坊世
學此と比しと才子と云琳切よまけ多り口
傍家と云く也と云く此必琳切よ毒と云く

一 なるまよふひくハ勿御を死する人とき
しりハ今井伊勢守さとし死し之位云云以耳よ立
ふ強し之位食なりけりさありさ羽三日よ
板坂法中へ振舞うさ高坂馬場山縣田反高坂
小山田さ外是惟大おほ人夫男小男たよ
中老より下れ旅者切なきなりけりさ
ら御持大おの中よ田反修理高是惟大おの
中よ横田す之信は友人あ合あり座敷し之ハ
程々の地す秘をす一城ハ理窟路をいさ中
地のなりをすハぬ程いつをさけ之をす人道
なり然る田反ありさ横田は右乃云る

定年外れ勘之れくを批判し之んをさあり
横田す之信文武二道し之智恵も是よりあり
賢奇舌受るよ地云持なり死別す提婆の無
色親着れ慈悲薬物の忌痴を文殊此智恵也
沙汰し人子細ハ今後津田のあり死さし之
提婆横井を双方無るよと之ハ親着武者之
河友方理なりと分ふさうさぬハ薬物今井伊
勢守巻理也さし之御さ之文殊子之を提
婆の無色親着れ慈悲薬物の忌痴を文殊の
智恵とあり吾も無色純毛利根毛さハめく
我佛のさく此二人の傍中より死さし死如也と

横田より高橋批判と此ハ名ざりともいひて座
を立たり

右ハ町高ハ馬場義原忠民ア山縣ハ飯沼源三
横田ハ義十希此町を此と第子ハ恒々カレトク
山縣ハ永祿八年子兄飯沼共アセ候云云此成
敗ありともより源三希と山縣とも高橋ヨ程成
是ハ生勢ハ希^ナ傍岸ハ背候ヤナリとも名ヲ勢
ナリ町ハ心ハ也セキ飯沼源三ともハ山縣ニ希
共清子ト云キ死ト云キとも此中一死とも如此程
甲列浄土宗ニ増云事ナリ

一 次年候と坊主ハ云るると云云元と此中一也

甲府ヨ之日市場八日市場是日市此立町五
五所此日三ノ多湯ヨ塩屋浮石橋門と云町人々
浄土宗ノ高祈与と云云云云坊主法眼也中
お家ヨ右此浮石橋門金子と云年月と云々
故借金浮石と云る役と云れ左浮石橋門と云
を此子ナリ法眼也カレ強ニカレ信ナレハ
自身ニ日多湯ハ坊主浮石橋門ノ事と云みり
此地ナリ死とも云町十九歳ヨナリ下女也法眼
取ヨリ熱別甲列必習ノ地下モ町人モ質
とも湯と云と一向ハ不足ノ取ヨリ湯ノ法
ハ通ヨリハ浮石橋門ノ隣レ町人モ湯ノハ

金子此方より一交取ありと申す女は之を居居る
いさふり四女を有く候もかほくハ年々よ及赤
い及びは女を有く人々を有く禮人といふあり
ありといふは以ては法然女とてう縁ハ科よとと
志く故傍に孔明よりかハあまなりしこありと
佛神と後をよお家と楚忽よ孔明といひる
何と世智れ傍にをりしこありとあり
後云云考くれば紅蓮なれば等形則座形の中
とてゆへ所前樹よ子歎然人此批判よ後家
子と持くともとわ宛をわとハ年中かまふと
なりと扱をさうん考れりなればんらんれりよ

わがうと一と申人多々十人れ四よ三二人を
後云云の以ては死なれおなり候多と扱を人
色を細後云云好方の目家とよすせ中なる則
始おとありは傍ハ一心強^{こゝろ}とありは傍
なりと一子細ハ来り前へりてお家れ男と一と
女れとるるとりて道理揚をいんをわれ先ん
よわやかりハまやうとて坊主の強れ或は押入
女と質よとりて之を後すハ故代お借方町
人より年坊主をわたり傍地をハまづりハ
お家よ後と毎々傍人下女とあり候と
年々か宛も及赤とありは坊主此久後借あり

也と云ふまゝにハ之とあり記と申す月と也入りた
ふ町人死しあゝハ無智の信れんは年月の
つれより事よ女と云ふ人と思ふ程に及ぼる
中し又もよ女と云ふ一と云ふハ此家も之何
れわれ浄土宗ハ不苦子細を浄土三部經よ六百
信女縁阿耨多羅三藐三菩提心願生彼國也
觀經中十六卷よあり信女と云ハ侍女たるなり
侍女のみ百人の信のありて一と云程の下女ハ女
と云ふ一と云れと云ふ一と云主の亦よ女れ居と
云く能く無事業をなすは信なりとも信也よ
んを云ふみよ世乃よ舞や強と云も人なり也

と云ふ一と云見よかうと云一と云ありと云れく
及これ名人の信と云つ信子と信なふと云強強
なと云て入りたと云強なりと云人よ面白
くせと云山れと云よ死成てと云一切れ人なりと云
及これ信んが信と云一と云高麻れ強よ中將嫁
の念仏之信れ也阿彌陀仏の教向せし何と云
也云と云家よ及名と云ひく類すし死る
よ不害と云と云慈悲強縁の心と云と云死と
の縁也云云と云此信也ハ名もわれ十信且信を
よあじ信至よかふと云申す信ハ勿祈なりと云れ
及もと云無事業をなすは信ハ武士れ大さよと云

後也けるは此の家は理なり是を神寺法眼と
しふさ由なるは捨いられぬ故町人お家とわが
より理をたれとては仕山乃科新此とよ麻白
新会と知すしゆは後法眼は信玄云吳見
といふ人その理をさうし心悟さるは此をた
まきりてさるは必用あり人一人も云
正徳学下無不解言致とさく是ハ以是れ為
なりとさくは此の家は此手就なりお
女人ハ其女ハ後ス今とさるは此女ハ徳人乃
批判は透る者なり在事志ありは後女
其新会の被友は其乃とわは此女は持る

子さくは此海海流り思ひなりとせし者なり是
は川と信玄云の川流り不流大慈大悲は名大徳
と其家と此家と是を感とるハ此外の事
成在紙面よりなり正徳の終終は長坂長保を致
了大炊也を以と

信列岩村田法苑宗の信云とる

一信濃岩村田といふ處を少分なり百姓のりけは
男ハ浄土宗女層ハ法苑宗とて男ハ女ハ新宗と
かんとて女ハ男ハ法苑と成終へとり何と加さ
信列後を接ふ此後とけを史傳の中無かりは
と男父母は為し一月は女父宛浄土此の家と

これハ女房ノかきかきハ女母レ為シ法苑坊主
と云ふまゝとこれハ男母外縁より若れと云ふ
と云ふつゝ女男高ル若きよりハ曉の若き若
女母母レ日よわたりお家と云ふ日ハ必ねどい
はとまのりけ坊主を温天ノ日といふは又終
子然衣をぬぎて垣よりけりて死の傍より立寄
小使の用事多し井のりといふは水と流る衣
をとりてとんととらん女房ハ坊主と云ふは然
いと死おとる髪をぬぎて未と水と流る衣と
より外とのと死をうゝ坊主と云ふと云ふは
之業とく海へ男もとりわたり此坊主と云ふ

衣のひかき法男大いといふり想ふとくし
ぬふよ如此の模様が又よ中へぬるなりと
極口脱とやひれたる坊主と終むと云ふの家
名ハ坊主をとりわたりわたりと云ふと云ふは
と云ふ目家とり死と云ふは後へとれを服物と云
お家ハ若ハ私と云ふ死をうゝ坊主と云ふは人
添甲着れにや坊主と云ふ坊主坊主坊主坊主
よ若き人と云ふハ何れと云ふは彼様なり百姓
中云ふハ振子あやうしと云ふ坊主坊主坊主
鉄火坊ハと云ふ坊主坊主坊主坊主坊主坊主
判せと云ふ坊主坊主坊主坊主坊主坊主坊主

ふり根よんこし地心へまのりお家と立序し秋分
をこころへそとま沼女三信多川多月四五人は被
付まふ必まふと一徳也必へど被まふり

甲列法苑宗此坊云事しる

一甲羽者中定山少路より新立ると中日蓮宗此坊
有是子細る十字又まは十字にみ此中より林生坊昌
沈清と云坊主女坊を持是を宗示此所人ぬ死を
か高玉結まは坊の五人しそくそらめ坊者迹
ふりまふぬやうに隣れ坊主より死をよせそ
所人忘る大義は坊の首へはつり又は大義は坊の
所人とたり謂ハ被なれ持病を仁死也此云云

慈悲深き人おしそくは流よりり故大義は坊の
家より久被忘れ死なれハ親此坊三百費此初坊を
被下ゆり何れは子柄をよはるやうよと云若し陣此立
阿ハ高具是なりと被下けな被合費んを也を此れ
と被始まはれハい死くふをひしとを結有れと
死ハ猶もその死結を又そくよりり有ふとよか
わりの比奥れなよ藝へ入る七夜よりり七夜目よ此
云云家その命を被始おふりハ忘る大義は坊
程とそくしはりそくそくそくそくそくそくそく
あり未練也此臨終時代此忘る飢殺といふなり
似合費役を被始付るそくそくそくそくそくそく

實賤と下持戒毀戒儀具是及不具是形
見利根鈍根等雨法雨と云此經ハ實と賤と
高と卑と戒と持と戒と破とけとせかたけと
及ひがりも也^正なりと邪なりと利根なりと
鈍根なりと等法のるをさうんとあり法あると
之はよ成る也さわれハ出家を依もはよ成不
あるなりハ不苦行よ法苑の法主ハ我持^依經と
蓋よさるのり也客懐とさうハ同蓮宗も房
持苦不苦ゆりてとせよとの心^法也地法信
なりハ又何のありん法信人射とこれ紅射と云
之ハ一さなくハ法信為信ハ隔とやハ法信

為信ハ隔ハ今ハ書立為陸信違書等後
とヤ也とせとて安ると云信と毒等後乃
代友よ被成^正と云之は後女房等とハ法苑坊主
と信安るとハ信門の言ハ年よ一安宛年貞と云
信なり信云云ハ大慈人然然大師と云出家を
教子と不被成能と云信主ハ信經と云と云
よ川野と云死後等文武二道の名人將と集
の云と云と云と云也

天正三年亥六月廿日

高坂淳二書

